ISSN 2189-8731

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

島嶼研だより

No.71　鹿児島大学国際島嶼教育研究センター　2016 年 3 月

主な記事

奄美分室開設に関する抱負（高宮広土）　p1
学生奮闘記「出会いを楽しむ」（下敷領一平）　p3
フィールドこぼれ話「ゴリラを訪ねてジャングルへ」（藤田志歩）　P9
連載　とうがらしに旅して
第十二回「種子島・屋久島の唐辛子利用―魔除け・湿布―」（山本宗立）　p10

奄美分室開設に関する抱負

国際島嶼教育研究センター　高宮広土

2015 年４月に鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室が開設されました。鹿児島大学では奄美島嶼実験室、奄美サテライト教室、徳之島サテライト教室、与論活性化センターおよび与論水産実験室などがすでに存在し、奄美諸島における研究と教育に力を入れてきていました。ではなぜ奄美分室が必要とされたのでしょうか。上記の施設と異なり、奄美分室の画期的な試みの一つは国際島嶼教育研究センターの四人の専任教員のうち誰か一人が必ず奄美に常駐することです。このメンバーの中で最も長く奄美で生活をすることになったのが私で９ヶ月の期間です。それでこの抱負の役目が私に回ってきたと思います。

実は私は今年度の四月に鹿児島大学へ着任したばかりの新人で、その前は二十数年間札幌に在住していました。鹿児島大学に移った大きな理由の一つは地元への還元ということでした。札幌にいた期間とほぼ同期間、私は奄美・沖縄諸島の先史時代を研究してきましたが、最近判明しつつあることは、この地域の先史時代は世界的に大変珍しい文化現象があったということです。これらのことを札幌を含む本土で学生や市民の方に話す機会が何度かありましたが、「興味深い・おもしろい」というコメントはあったものの、十分に社会に還元できていないと感じていました。やはり地元で得たものは地元に返すのが一番ではないかという思いが強くなったのです。実際ここに来て研究のお話をすると皆さんの関心の度合いが本土と異なることを体験しています。

そこで、奄美分室に関しての抱負なのですが、私は以下の三点が重要ではないかと考えています。一つ目は大学の一部なので、まずはこの地域の研究の促進です。鹿児島大学では奄美諸島の自然・生物の多様性と保全活動および文化や社会に関する研究を積極的に実施してまいりました。その結果明らかになりつつあることは、奄美諸島の自然や文化が世界的に大変ユニークだということです。同僚の研究などを見て

も奄美諸島の自然と文化は大変奥が深いと感じます。さらなる研究によって、この地域の自然と文化の貴重さがより一層理解されることになるでしょう。二番目の目的は、その情報をやはり地元に還元するということです。奄美に来てすぐに地元の方から「研究者はデータだけ持って帰ってしまう」と言われました。分室ではセミナーなどを通して精力的に私共の研究を紹介していますが、研究者は可能な限り地元の方々に最新の情報を提供して頂きたいですし、地元の方々にはこのようなセミナー等に参加していただければ嬉しい限りです。第三番目は、セミナーなどを通して若い人（高校生など）に奄美の自然や文化の貴重さを知って頂き、一人でも多くの地元出身の研究者育成に貢献したいということです。将来的には地元研究者の育成はとても重要だと感じています。

分室を通して、研究の促進、最新情報の地元への還元および地元出身の研究者の育成に少しでも貢献できればと願います。さらにこれだけすばらしい情報があるので、地元への還元と同時に本土や海外へもその情報をどんどん提供できればと思います。

植物観察会：「初冬の奄美で森の木を見る会」奄美の植物の名前を知るためのポイントを鹿児島大学総合博物館館長鈴木英治教授が解説しているところ

奄美分室特別セミナー：「知りたい！奄美の海を支えるサンゴたち」で共同研究者・宮崎大学農学部深見裕伸准教授が奄美には未報告のサンゴが数多くあることを報告

学生奮闘記

出会いを楽しむ

下敷領一平（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）

現在、医歯学総合研究科の国際島嶼医療学講座に所属し、離島をフィールドとした疫学研究を行っています。また、医学生の離島実習に同行させて頂き、離島医療について多面的に学んでいます。

疫学研究では、日本多施設共同コーホート研究（J-MICC study）の鹿児島フィールドとして、2005 年からベースライン調査を開始しています。沖永良部島、与論島、徳之島、奄美大島、喜界島を中心に、5 年目の第２次調査も終えて、20 年にわたる追跡調査を行っている最中です。がんや循環器疾患に関する予防研究を行い、地域住民に還元できることを目指しています。先日、第 26 回日本疫学会学術総会において、「海洋療法施設利用に伴う健康指標の変化に関する研究」という演題にて、初めての学会発表を行いました。緊張で足が震えましたが、研究者を目指す一人として、その一歩を踏み出すことができました。

地域医療教育の面では、離島医療人育成センターの活動として、医学生の離島実習のサポートを行い、医療現場が抱える様々な問題について学んでいます。この実習は、地域医療に関わる人的資源の質と量を高めることを目的とした、離島へき地医療を志す医学生の教育の場であり、参加することで多くの刺激を受けています。医療従事者が島に残るにはどうすれば良いかを考えながら、自然の雄大さ、人としての豊かな生活・文化を、食事や観光の中で島の良さとして伝え、離島で共に学び共に楽しむことができます。

また、大学院共通科目の全学横断的教育プログラムとして、「島嶼学概論Ⅰ・Ⅱ」「太平洋島嶼学特論」を受講しました。授業の一環で、三島村の硫黄島、十島村の中之島、ミクロネシアのピス島への実習に参加しました。私自身、奄美群島の島々へ行く機会は何度もありましたが、三島村・十島村へ行くのは初めてでした。人口が少ない分、住民同士の絆は深く、結いの精神が生きていました。どちらの島にも活火山があり、大好きな温泉に入ることもでき、「裸の付き合い」ができた実習でした。

ピス島もまた小さな島であり、島には電気がなく、食料もほとんどが自給自足での生活でした。島民と一緒に過ごしたのは数日間でしたが、話す言葉も肌の色も全く異なる私たちを受け入れ、優しく接して下さり、国境を超えた仲間を作ることができました。真っ青な海の色や生い茂った木の緑など自然豊かな島の環境に感動し、世界が平和であることがどれだけ素晴らしいことか再認識できた貴重な経験となりました。

これらの体験を振り返り、島嶼の人々と触れ合い、島嶼での生活を楽しむことで、素をさらけ出せる自分がいることに気付かされました。きっとそれが、私にとっての島嶼の魅力であり、島嶼をフィールドとした研究の道へ進ませてくれた理由だと感じています。そんな私の背中を押しているのが、嶽﨑俊郎先生の言葉、「出会いを楽しむ」です。ひとつひとつの出会いを楽しみ、これからも島嶼地域の保健医療に貢献できるように勉強していきたいです。

沖永良部島での調査にて

ミクロネシアでの実習にて

鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「島の魚と私たちのこれから―鹿児島県島嶼域における魚類の多様性と持続的な利用へ向けた取り組み―」

平成 27 年 11 月 28 日（土）に鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「島の魚と私たちのこれから―鹿児島県島嶼域における魚類の多様性と持続的な利用へ向けた取り組み―」を開催いたしました。当日は多数の皆様方に御参加いただき、盛会となりました。

趣旨

南北 600km に及ぶ鹿児島県には、島嶼域を中心に多様な魚類が生息しており、島嶼域ごとで固有な魚類相や希少種の生態等が近年の研究で明らかになっています。一方で、魚類は重要な食料資源であり、四方を海に囲まれた島嶼域では基幹産業のひとつを担っています。近年では、マグロ養殖が島嶼域の各地で展開されてきており、島嶼域の水産業や地域社会自体が急速に変化しつつあります。絶滅の恐れのある種類については、生息環境を含めた保全への取り組みが求められますが、島嶼域の自律的な発展に際しては、水産資源の動向把握と持続的な利用へ向けた取り組みがより強く求められています。本シンポジウムでは、鹿児島県の島嶼域の魚類に関する多様性研究や生態、資源、水産振興に関する研究者が集い、多様性の再評価と共に、島嶼域の自律的な発展を目指した利用のあり方について認識を深めることを目的としました。「豊かな海の生態系を見守り、環境と調和した島嶼域の水産業と社会のあり方」を提言する機会としたいと考えています。

１）　島嶼域における魚類の種多様性と分布特性

本村浩之
（鹿児島大学総合研究博物館）

鹿児島県の島嶼は、県本土北西沖の八代海に浮かぶ獅子島（北緯 32°）から沖縄島辺戸岬北方沖の与論島（北緯 27°）まで南北 600 km におよぶ広域に散在している。主な島嶼群として、北から南へ甑島列島、宇治群島、草垣群島、大隅諸島、トカラ列島、奄美群島があり、およそ 600 の島から構成される。大隅諸島から奄美群島までを薩南諸島とよぶ。

これまで鹿児島県の島嶼における包括的な魚類の種多様性調査は行われておらず、各種の分布情報としては、漠然と「薩南諸島に生息する」、「琉球列島に分布する」などとされていた。しかし、近年、演者らの研究チームによる島ごとの大規模な魚類相調査によって、鹿児島県の島嶼域における魚類多様性と魚類相の特徴が解明されつつある。ここでは、各島嶼群の魚類相の特徴を踏まえつつ、薩南諸島を二分する魚類生物地理区形成の要因を探り、その境界線がある屋久島の特異的な魚類相を紹介する。また、現在調査中の甑島列島や宇治群島の魚類相の特徴を紹介したい。

２）　絶滅の恐れのある魚類と保全へむけた取り組み

久米　元
（鹿児島大学水産学部）

鹿児島県では現在、環境省により最も絶滅の恐れのある種として 10 種以上の魚類が指定されている。その代表種が、もともと琉球列島にのみ分布するリュウキュウアユである。日本本土から屋久島にかけて生息するアユとは別の種類で、野生のものは現在奄美大島にのみ生息している。奄美大島では古くから“ヤジ”と呼ばれ、地元の人たちに親しまれてきた。アユ同様、リュウキュウアユは両側回遊を行い、川のみならず、冬季から早春にかけて成育場として

数か月間、海を利用している。私たちの研究室では、リュウキュウアユが奄美大島の川と海をどのように利用して生活しているのか詳しく知るために、琉球大学、鹿児島県環境技術協会の研究者の方々と共同でさまざまな調査、研究を行っている。また、野生個体群の絶滅の危機に備えるために種苗生産技術の開発や、保全への気運を高めるために地元小学校への出前授業、地域住民の方々との産卵場の造成等といったアウトリーチ活動を行っている。本シンポジウムでは、リュウキュウアユの生態について分かってきたこと、保全へ向けた取り組みについて、最新の知見を織り交ぜながら紹介したい。

３）　鹿児島県島嶼域の水産業概要と資源保護に向けた取り組み事例

宍道弘敏
（鹿児島県水産技術開発センター）

温帯から亜熱帯にかけての南北約 600km に及ぶ広大な県土を有する鹿児島県は、薩摩・大隅両半島と、獅子島、甑島、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美群島など多くの島嶼により構成され、海岸線長は 2,664km に達する（全国第 3 位）。周辺海域は、複雑な海岸線や海底地形、及び日々流路が変動する黒潮の影響により、複雑な海洋環境を呈している。多種多様な水産資源を対象に営まれる本県の海面漁業・養殖業は、生産量約 146 千トン（全国第 9 位）、生産額は約 766 億円（全国第 4 位）（H25）であり、全国でもトップクラスの水産県である。さらに、有人離島面積及び離島人口が全国第 1 位であり、島嶼域において、水産業が主要産業として盛んに営まれている点が特徴といえる。ここでは、鹿児島県海域、特に島嶼域を取り巻く海洋環境の特徴と、多様な漁業資源を対象に営まれている水産業の概要を紹介するとともに、厳しい経営環境の中、漁業者らが自主的に資源保護に取り組んでいる事例として、甑島のキビナゴ、南西諸島のマチ類の資源管理の事例を紹介する。

４）　鹿児島県島嶼域における漁業振興に向けた取り組みの成果と課題

鳥居享司
（鹿児島大学水産学部）

鹿児島県は数多くの離島を抱えている。その離島経済を支える産業のひとつは「水産業」である。離島周辺で漁獲される魚介類の多くは本土市場に出荷され、我々の食卓を支えている。

しかし、離島における漁業経営は厳しさを増している。燃油や漁具など生産関連資材は本土に比べて割高であり、生産コストは高止まりしがちである。出荷はフェリーの運航スケジュールに規定され、輸送費用も嵩む。市場までの時間距離が長いことから、鮮度劣化に伴うセリ入札価格の下落もみられる。このように離島における漁業経営は生産から販売まで条件不利を被る。離島漁業の衰退は、漁業の有する多面的機能の喪失、離島経済や食料供給の弱体化を招く可能性がある。一方で、各漁業地域では、漁業振興を目指した取り組みが展開している。

そこで本報告では、漁業振興に向けた多様なアプローチによる効果と課題について紹介したい。まず、離島漁業の振興を目的にした政策的支援の枠組みについて整理する。それを踏まえたうえで、養殖資本の誘致による振興を目指す甑島（薩摩川内市）、冷凍出荷による販路確保を目指す中之島（十島村）、生産振興による振興を目指す与論島（与論町）の事例を紹介したい。これらの事例を通じて、離島における漁業振興に向けた取り組みの成果と課題について整理したい。

討論の風景

国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 162 回　　2015 年 9 月 28 日

近世の種子島と家譜史料

屋良健一郎
（名桜大学国際学群）

中世の種子島を支配していた種子島氏は、16 世紀に島津氏に従属し、近世には薩摩藩の家老として活躍した。種子島家が 19 世紀に編纂した『種子島家譜』は、種子島の歴史を知るための重要史料であり、これまでの研究でも頻繁に利用されてきた。『種子島家譜』以外にも、種子島には延宝 5 年（1677）に編纂された『種子島譜』、明和 6 年（1769）に編纂された『種子島正統系図』という二つの家譜、さらには種子島家の家臣によって記された家譜に類する史料が存在する。これらの史料の記述には似通ったものが多いが、若干の違いも存在する。その違いに注目することで、それぞれの家譜の特徴や、『種子島家譜』だけでは見えてこない種子島の歴史について考えていきたい。また、家譜以外にどのような史料が種子島に存在するのかを紹介し、今後の種子島研究の展望についても述べたい。

第 163 回　　2015 年 10 月 19 日

あなたの知らない寄生虫の魅力を語る―南の島は寄生虫天国―

上野大輔
（鹿児島大学大学院理工学研究科）

寄生虫。この言葉を聞いて、ポジティブなイメージを抱く人は世界中に一体何人いるでしょうか。おそらく多くの人は、寄生虫に危険、有害、気持ち悪い等々の、ネガティブな印象を持っていることでしょう。しかし、寄生虫の姿形を実際に見たことがあり、鮮明に思い浮かべることができる人はあまりいないのではないでしょうか。一括りに寄生虫と言っても、実は様々な種類が存在し、その暮らしぶりは非常に多彩です。演者はこれまで、主に海に生きる寄生虫に焦点を当てた研究を行ってきました。特に、世界各国の熱帯域から亜熱帯域の島々の海には、様々な動物を宿主とする寄生虫が多数生息し、そのほとんどは未知の生態に包まれているばかりか、一度も発見されたことがないものであるということがわかってきました。果たして、それらはみな人間に危害を加える恐ろしい種ばかりなのでしょうか？今日は、演者が研究してきた海の寄生虫を中心に紹介し、その魅力や研究意義についてお話したいと思います。

第 164 回　　2015 年 12 月 14 日

帝国の境界に位置する島―19 世紀後半の極東における島嶼と地政学―

ROYLE Stephen A.
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

極東では欧米諸国に有利な不平等条約のもと 19 世紀に条約港が設定され、それに伴う衝突が各地で起きた。島津久光の行列に乱入したイギリス人が現在の横浜市鶴見区生麦付近において殺傷された生麦事件は有名である。この事件を契機として 1863 年に薩英戦争が勃発した。鹿児島市維新ふるさと館には、この戦争が「日本は鎖国をやめて開国するべきであることを明らかにした」との掲示物がある。1865 年には薩摩藩遣英使節団 19 名（うち薩摩藩第一次英国留学生 15 名）が英国に渡り、1868 年に明治維新が起きた。

極東は砲艦外交により開港させられたところが多い。アフガニスタンや英領インドがロシアの脅威に晒されていた戦況下、英国は戦略的に重要な巨文島（Port Hamilton）を 1885 年 4 月に朝鮮王朝から奪取した。巨文島占領を他国（特にロシア）に対して先行するために、そして朝鮮（将来的には対馬などの日本の島嶼）に

英国の領土を持つために、英国は島を租借あるいは購入することで占領を合法化しようと考えていた。しかし、英国が巨文島を占拠することで、ロシアが巨文島に手を出せないこと自体に意味があった。中国と日本は公的には抗議したものの、暗黙裡には了承していた。

島を防衛するためには大規模な要塞が必要であるとわかったため、アフガニスタンにおけるロシアとの紛争が解決した後、英国は巨文島を放棄したかったが、ロシアの巨文島への進出を恐れた。しかし、中国が「ロシアと中国は朝鮮の正当性を尊重する」という合意を取り決め、ロシアが巨文島を占領しないと思われたため、英国は 1887 年 2 月に巨文島を放棄した。帝国の境界に位置する島における一連の出来事は、無力さや周縁性、戦略上の立地といった島の特徴を典型的に示していると思われる。

第 165 回　2016 年 1 月 25 日

海藻研究者 37 年の回想

野呂忠秀
（鹿児島大学水産学系／水産学部）

鹿大における藻類学の研究は、川内川産チスジノリを記載した岡田喜一や紅藻アマノリの分類学的な研究をした田中剛に始まり（1950’s）、その後は植物プランクトンや海草類の野澤洽治（1970’s）と紅藻イギス科の分類学的研究を行った糸野洋（1980’s）、赤潮プランクトンの井上晃男（元島嶼センター長、1970’s）へと継承された。演者は野澤研究室で奄美大島瀬戸内町の藍藻を卒論で研究し（1974）、北大大学院で正置富太郎に師事し、紅藻サンゴモの分布生態を研究し磯焼け海域におけるサンゴモが *Lithphyllum yezoense* であるとした。その後は、鹿大水産学部に助手として採用され、鹿児島湾産赤潮の原因種が *Chattonella marina* であることやその微細構造を調べ、冬季の低温下で休眠胞子が海底の泥の中で越冬できることを証明した。後に緑藻ヒトエグサの養殖や褐藻ホンダワラ属の分類学研究に転向し、鹿児島湾の海洋観測調査（2000）や種子島におけるトコブシ（小型アワビ）の資源調査も行った。島嶼センターの Yap 島調査ではモンパノキのシガテラ毒低減効果を調べ、インドネシア水産高。校教員研修、“3 億円プロジェクト（通称）”の運営を主導したが、このたび 37 年の鹿大勤務を終えるにあたってこれらを回想したい。

野呂忠秀教授

第 166 回　2016 年 2 月 15 日

捕鯨の国際政治学―北極域グリーンランド島における先住民生存捕鯨と国際捕鯨委員会―

高橋美野梨
（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

国際捕鯨委員会（International Whaling Commission: IWC）は、鯨類を適切に保存し、捕鯨産業の秩序ある発展を目的に 1948 年に設置された。管理対象は、全世界に約 85 種いる鯨類中、大型 13 種に限定される。しかし、クジラを資源として、さらには産業として管理する主要な国際機関であり続けている。そのような IWC が公式に規制・管理する捕鯨形態の一つに先住民生存捕鯨がある。その定義は、第 33 回（1981 年）IWC 年次会議において確立されている。

先住民生存捕鯨とは、先住民による地域的消費を目的とした捕鯨であり、古くからの伝統的な捕鯨やクジラ利用への依存が見られ、地域、家族、社会、文化的に強いつながりをもつ、原住民／先住民／土着の人々により、またそれらの人々に代わって行う捕鯨。

享受する主体は、アメリカ（アラスカ州）のイヌピアット／ユッピク、アメリカ（ワシントン州）のマカー、ロシア（チュコトカ自治管区）のチュクチ／ユッピク、デンマーク（グリーンランド）のカラーリット、セント・ヴィンセントおよびグレナディーンのベクウェイ島民である。商業捕鯨に対する風当たりが強まり、その一時停止（いわゆるモラトリアム）が採択された第 34 回（1982 年）IWC 年次会議以降も、先住民生存捕鯨は IWC が管理し、実施される主要な捕鯨形態となっている。しかし、IWC において先住民生存捕鯨は、認められるべき権利として常に位置付けられていたわけではなかった。本報告では、先住民生存捕鯨枠を享受する地域の一つ、グリーンランドを事例に、IWC の制度と現実との相反を明らかにする。

研究会の様子

お知らせ

（1）着任

外国人客員教授として英国・クイーンズ大学ベルファストの Stephen Arthur Royle 氏が 2015 年 9 月 25 日に着任しました。研究テーマは「帝国の末端島嶼―19 世紀後半の極東太平洋の島嶼と地政学―」、専門は「島嶼地理学」で、2016 年 3 月 25 日まで滞在予定です。

最近の出版物

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.36, No.2, 2016

Research Papers

EDWARDS F.: Tracing Language Use and Policy in Cook Islands' Schools: 1827-2003

CHUN K.: A Trial of the History of Anthropology in Taiwan during the Japanese Occupation: Focusing on Inou Kanori, Utsurikawa Nenozo, and Kanaseki Takeo

HATA H. and MOTOMURA H.: First Specimen-based Records of *Pristipomoides flavipinnis* (Perciformes: Lutjanidae) from the Tokara and Amami Islands, Japan

Information

GONIWIECHA M. C.: Japanese Influences on Kapingamarangi

～フィールドこぼれ話～

「ゴリラを訪ねてジャングルへ」

藤田志歩（鹿児島大学共同獣医学部）

キャンプの朝は、お手伝いのおばさんたちが朝食の支度をするのを、一人用テントの中で聞きながら目を覚まします。テントから這い出し、「夜、ゾウがテントの近くまで来ていたね。」と彼女たちに挨拶をすると、「そう。だから、私が大声出して追っ払ってやったわよ。」と、村一番のしっかり者のおばさんが答えます。そうしているうちに、調査の手伝いをしてくれているトラッカーたちも、次々とそれぞれのテントから出てきます。みんなで簡単に朝食を済ませ、身支度を整えると、さあ出発。今日の調査の始まりです。

トラッカーはわずかに倒れた草の倒れ方や食べ残した果実のかけらから、今日はゴリラたちがどこにいるのか見当をつけ、私を連れて行ってくれます。しばらくすると、ギャーと喧嘩でもしたのかゴリラの声が聞こえてきます。私たちは、コンコンコンと舌を鳴らして自分たちが近くにいることをゴリラたちに知らせます。グゥというげっぷ音でゴリラから返事が返ってくれば、「そばにいてもいいよ」という合図です。もしこれが知らないゴリラのグループなら、ウォッという叫び声と下痢便を残して一目散に逃げていきます。

ゴリラが見つかると追跡の開始です。何を食べ、誰と誰が近くにいて、喧嘩をしたり、仲良く一緒にくつろいだり、といった生活の様子を野帳に記録してゆきます。ゴリラにしてみれば、毎日後ろからストーカーのように人間が付いてくるのですから、いくら慣れたとは言え、きっとうっとうしいことでしょう。私たちは、なるべくゴリラたちの邪魔をしないように心がけてはいるものの、もっと近くでよく見たいと思うがあまり、近付き過ぎてしまうことがあります。すると、グループ唯一のおとな雄であるシルバーバック（おとなになると、背中の毛が白くなるため、このように呼ばれます）に怒られます。シルバーバックはグループみんなの安全を常に気にかけながら、危険を感じると真っ先に先頭に立ちます。シルバーバックは、100 kg 以上はあろう大きな体をしていますが、力まかせに襲ってくることは滅多になく、じっと私たちを睨みつけてから、大きな背中を見せてつけて威圧します。

霊長類の中でもヒトに最も近い大型類人猿は、寿命が長く、彼らの社会や生態を理解しようとすると、何十年という年月がかかります。そのため、私の調査は毎年同じ調査地に通い続けることになります。ここ９年ほど、ガボン共和国に通っています。最初にここの森に入った時は、現地名で「フールー」と呼ばれる小さなブユに手足や顔などを刺されて真っ赤に腫れ上がり、悶絶するほどの痒さに苦しめられましたが、通ううちに刺されても腫れなくなりました（痒いのは相変わらずですが）。何週間ものテント暮らしは快適とは言えませんが、ジャングルの中に入って行って、動物たちがどのように暮らし、どのような一生を送るのかを間近に見ながら、自分もまるでその中で暮らしているかのような、わくわくとした感じは、何度訪れても薄れることはありません。

調査対象にしているゴリラグループのシルバーバック

「とうがらしに旅して」

第十二回　「種子島・屋久島の唐辛子利用―魔除け・湿布―」

『中種子町郷土誌』を読んでいて「こしょう（唐がらし）を軒にかけておくとはやり病気がこない」という唐辛子の魔除けとしての利用方法を見つけたときにはとても驚いた。『まよけの民俗誌』によると、茨城県や千葉県、新潟県、長野県でもはやり病の魔除けとして戸口に唐辛子を吊るすことが知られているようだ。奄美群島以南ではクモ貝やスイジ貝などの貝類を軒先に吊るして魔除け（厄除け）とすることが多いため、唐辛子を魔除けとして利用する文化は、大隅諸島と奄美群島の間に線を引くことができるのかもしれない。『屋久町郷土誌第三巻』の安房村の項に「打ち身のとき、トイシ草とタマゴ・メリケンコ・焼酎・コショウなど七品をすり合わせて患部につける」とあったが、この「コショウ」が唐辛子なのか胡椒なのか、判別がつかない。どうしてかといえば、屋久島における唐辛子の方言名が「こしょう、こーしょう」だからだ。この前三島村で唐辛子の調査をしたとき、三島村における唐辛子の方言名は「こしょう」だと聞いていたので、「こしょうについてお話を伺いたいのですが」と島民の方々に質問をした。すると、それを唐辛子ととらえる人がいたり、胡椒ととらえる人がいたり・・・。そこで「とうがらしについて・・・」と質問してみると、「とうがらしは知らん」となり、残念な思いのなか世間話をしていると、「でもこしょうなら昔はあったなー」となる。聞き手・話し手の年齢や性別、出身地、長らく暮らしてきた地域などの違いにより、「こしょう」の意味がずいぶんと変わってくるものだ、と再認識したばかり。ただし、『与論島薬草一覧』や『沖縄民俗薬用動植物誌』、『聞き書佐賀の食事』に唐辛子の湿布としての利用方法が書かれていることや、現在市販されている温湿布に唐辛子の成分が入った製品もあることを考慮すると、屋久島の「こしょう」湿布は「とうがらし」湿布なのではないだろうか。（山本宗立）

編集後記

この 2 月に奄美大島の大島高校で客員教授のロイル先生が講演を行い、高校生たちと意見交換する機会がありました。高校生も英語で奄美の食べ物や観光の見所を紹介してもらい、その素晴らしい発表に感心しきっていました。島の高校生と海外の研究者を結ぶというのは、奄美分室が出来た一つの成果であり、これからも続けていきたいと思っています。（大塚　靖）

懇親会でチヂンを叩くロイル教授

島嶼研だより　No. 71　平成 28 年 3 月 14 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580　鹿児島市郡元 1-21-24
電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197
電子メイル　shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp
WWW　http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html